

第Ⅱ部 セミナーを終えて

トラウマを癒す：中日関係における避けられない課題

張連紅（南京師範大学教授、歴史学）

1. 生存者の精神的トラウマ

物質的条件に対して、生存者の精神的トラウマの問題はあまり注目されていないままである。彼らに対しては、社会的治療措置もあまりとられていない。生存者の人々が経験した大虐殺や戦後の生活もそれぞれ違っており、精神的トラウマの表現もそれぞれ違い、その格差は大きいだろう。その中で、自己治療のできる人は極少なく、ほとんどの人は、過去の暗い記憶に生きていて、今もトラウマに悩んでいる。若い時に受けたトラウマは、時の経つにつれて消えるどころか、かえって復活するようだ。毎晩のように悪夢にうなされて飛び起きる人もいる。そのため、行動や言語に異常をきたし、普段の日常生活からずれてしまうようになった人もいる。このような精神的症状は生存者が高齢になるにつれて悪化しつつある。筆者は南京大虐殺生存者調査をし、生存者と接してきた。彼らの心身のトラウマに対する反応には程度が違うが主に統合失調症型、閉鎖型、神経質型の3つのタイプがあるように思われた。

統合失調症型。筆者の調査した生存者には、2003年に亡くなった黄玉英（仮名）という老人がいて、彼女は明らかに統合失調症型に属する。1926年生まれ。1937年6月に、彼女は父や一家と北京から南京に逃げてきた。12月13日、彼女は父と湖南路口に来た時に日本軍に出くわした。日本軍は銃剣を彼女の父の胸に刺し込んだり、銃の柄で父の頭を叩きついたりした。打たれた父は倒れて脳から脳みそが流れてきた。黄玉英はその後、金陵女子大学の難民区に逃げ込んだ。金女大難民区の責任者ヴォートリンは彼女を収容し、学校へも送った。大虐殺で父を亡くした彼女はヴォートリンを自分の一番の親だと思っていただろう。だから、年老いても、毎日毎日ミス・ヴォートリンのことが懐かしくてたまらなかったようである。人に会っては命の恩人、アメリカ人の布教師ミス・ヴォートリンの話をする。そして、私がミス・ヴォートリンの写真を一枚差し上

げたところ、家にかけて、毎日、その写真を拝むようになった。しかし、ある時、何らかの事情でその写真がなくなった。それで、彼女はとても不安になって苛立っていた。私が彼女に会いに行くたびに、「泥棒が写真を取っていった。わしにミス・ヴォートリンのことを思わせなかつもりだな」と言った。

彼女は、最後、重篤な統合失調症にかかって、毎日町へ行き、ごみ拾いに歩き回った。家の中はごみの山になった。彼女の年金は生活に十分だった。そのことは、お金のためではなく、おそらく、大虐殺後の物資の極度の不足への恐れが彼女にショックを与え、その体験は老年になった彼女の心にまだ深く影響していた。その後、彼女はまったく生活できなくなり、町内会の人々によって老人施設に送られた。彼女は、その後、もう正常に考えることも出来なくなった。1999年から2002年にかけて、私が調査した幸存者の中で、彼女は会いに行った回数が一番多い人である。その後、私の院生、許書宏も何回も見舞いに行った。

閉鎖型。閉鎖型の幸存者は普通、自分の体験を人に訴えない。家族の人にもあまり言わない。彼らは、昔の悪夢の記憶が早く頭から消えていくようにとずっと祈っているようである。彼らは他人に自分の心の中にある痛ましい神経に触れて欲しくない。幸存者の姜秀英（仮名）は1925年生れ、内気な性格で無口である。インタビューを受ける前まで、他の人に昔のつらい経験について話したことはなかったそうである。辛い経験とは12歳の時に日本軍に強姦された心の痛むことである。その事件後、彼女は成人して3回結婚したが、皆、子どもができないという理由で離婚させられた。彼女は私達にこう話した。「夜よく悪夢をみた。暴行されたこともよく悪夢に出る。今でも、外に足音がすると身震いをして怖い。だから、一人で家にいる時、いつも、ドアをあければなしにしている」。

また、彼女は、「汚い」という字が気になってしょうがない。毎朝の日課は掃除。あのことは他の人に話したことはない。あれは、悪いことだから。忌まわしいことだからこそ、養女にも話したことはない。その後、私は彼女に3回も会いに行ったが、互いに約束したように、どちらも日本軍や戦争のことについて、一言も口にしない。2003年に彼女は病気でなくなった。3日後、私は南京石子岡へ彼女の葬式に行った。彼女の養女はおそらく、今でも、お母さんの

悲しい過去とトラウマを知らないでいるだろう。実際、私は、聞き取り調査をしている時に、何回も、幸存者に断られた。南京大虐殺を経験した多くの老人は、私達の訪問目的を知ると、インタビューに出ないようにいろいろと口実を作る。彼らは、心が再び傷付けられないために、痛ましい過去を喚起しそうなことならすべて触れずに、必死に逃れようとしているように思う。

神経質型。調査中、多くの幸存者は警戒心が強く、神経がずっと高ぶっているようだった。1999年9月に私は、幸存者蔣秀英老人（仮名、1923年生まれ）の聞き取りに下関に行った。大虐殺の痛ましい過去を話してから、日本軍の復讐に怯えているから、写真を撮らないようにと何度も頼まれた。これは代表的な神経症型の例である。

幸存者の多くはインタビューを受けている時、ほとんど緊張で苛立っていた。そして、話しているうちに興奮するようになり、話が終わってもなかなか落ち着かないようである。甚だしい時は何日も眠れないそうである。

ここ数年来、新聞やテレビなどマスコミのジャーナリストが幸存者にインタビューをする頻度はかなり高い。それらのインタビューは、幸存者に精神的圧力を加えている。顔から見て、幸存者の多くは、普通の人々と変わりがないので、人々は彼らの気持ちを理解するチャンスが少ない。それで、彼らの世界を体験することもできない。

南京では幸存者の精神的病気を治療する臨床心理専門医が不足しているの
で、彼らのトラウマのありさまを知ることもできない。もちろん、幸存者の一部は自己治療によって、暗い過去から逃れた。例えば、李秀英、夏淑琴、姜根福、常志強などである。彼らは国内外のジャーナリストや平和を求める人々のインタビューに応じたり、歴史の証人になったりしている。彼らの心からの願いは、平和な時代に生活している人々に彼らの不幸な過去を分かち合って欲しいということだろう。張秀紅のような幸存者はインタビューを受ける前にすでに、過去の暗い記憶から脱出した。彼女が自分のトラウマが癒された「理由」を知っているという一つは、彼女の夫が生きていた間、ずっと、彼女の悲しい過去とトラウマを理解してくれたそうである。もう一つは、自分が暴行されたが、自分の犠牲によってお爺さんを助けたということだ。

2. ト라우マは人々を苦しめている

90年代以来、南京大虐殺は、中日関係におかれた重要な問題の一つになっている。両国内外の学術研究分野が、この課題を深く研究するようになってきている。歴史史実そのものを研究するとともに、人々はその悲劇と残虐な暴行が政治、社会また文化などに与えた影響を反省し始めた。大虐殺は幸存者の心身を未だに苦しめるだけではなく、今日の南京市民の日常生活にも影響している。そのトラウマは、中日両民族国民の心理的な暗い陰になり、良い民間交流も妨げられる。

南京大虐殺は、南京に住んでいる南京市民にとっては、直面せざるをえない歴史である。そして、それについて色々やってきたので、長年の積み重ねで、すでに南京文化の一部になった。南京には、公衆の記憶の場として、大虐殺記念館や、数多くの遭難者記念碑があり、それはいつでも、人々を過去に連れていき、心の底にあるトラウマを喚起する。南京大虐殺発生地江東門にある南京大虐殺遭難者記念館は、空間を区切るなどして組み合わせた大きさの違った意味あるいくつかの建築物からなっている。そこに遭難者の遺骨遺物や写真・文字などの歴史資料が展示されている。空間と特別な実物の組み合わせはシンボリック空間構造になった。記念館は一般の市民に開かれた施設になっている。人々はその中に入って、特別に構成された意味ある空間構造を見て、その中にこめられたものを理解する。社会的記憶はそれに深く影響されている。清明は亡くなった人の追悼に参る日だが、その日、大勢の市民が、自ら記念館に墓参りにいく。毎年12月13日には、市政府は記念館で追悼式をあげるなど、様々な記念のイベントを行う。このような民間と政府のイベントは、シンボリック空間の意味をますます強化し、空間は再構成されていく。この特定の空間構造と記念式典の組み合わせは、多くの見学者の歴史の記憶を強め、それによって社会記憶も強められている。目に見える記念館のような建築物のほかに、まだ目に見えない要素も多い。それらは、常に南京市民のトラウマの記憶を喚起している。現社会に起こる事件は、大事小事を問わず、南京大虐殺に関わってしまうと、必ず、南京市民の神経を刺激してしまうといっている。

日本軍国主義と関連のある現代の事件さえもそうである。1982年に日本で教科書事件が起こった。その後、侵略歴史を美化する、南京大虐殺を否認する論

説は続出して絶えない。甚だしい時には、日本右翼は公開集会をして、南京大虐殺は20世紀の世界最大のでっち上げと叫び続けた。さらに、映画や裁判などの形で、南京大虐殺の戦犯の罪を覆そうとしていた。日本右翼の言行は、南京市民の癒されていない心の傷に塩を塗るようなものである。南京大虐殺という悲惨な歴史は、南京市民の生活の中で追い払おうとしても追い払えない暗い陰となっている。南京大虐殺に関わる事件はすべて、南京市民の中に強烈な反響を引起してしまう。

1995年3月に、南京市が市民に南京大虐殺遭難記念館二期工事に「一元」寄付せよと呼びかけると、1ヶ月あまりで、100万人以上が積極的にそれに応じて寄付した。そして、総額160万余りの資金が集まった。2000年12月、南京市民は、盛島というホテルが「中国を侵略した日本軍南京大虐殺正覚寺遭難者」の記念碑を移そうとしていることを知ると、直ちに強く反対した。2002年3月、中国を侵略した日本軍南京大虐殺遭難同胞記念館の改名について検討しているというニュースが出ると、南京で大きな波瀾が起きた。公衆の記憶の場としての記念館と記念碑は、南京市民の遭難同胞を追悼し、心の底に埋まっているトラウマを癒す聖地のようなところに違いない。

2006年12月10日の夜、南京東南大学設計院に属するある会社の39歳の社長は、5万元で数十人を雇って、南京市内にあるすべての日本製の車に何かを振りかけたり、ポスターを貼ったりして日本製品ボイコットの宣伝をした。車の持ち主には、江東記念館付近の車修理工場に行ってもらい、そこで洗車してもらった。8元の洗車費は、その社長がすでに事前に払っておいた。ある被害者の車主は110番に通報し、南京公安局が急いで駆けつけ、この事件を阻止した。この事件はそれで拡大せず済み、国際摩擦にはならなかった。

南京のマスコミは常にこのことに注目しているので、「南京大虐殺」は、市民の日常生活の一部になっている。(不完全な)統計によると、1986年から2004年にかけて、重要な新聞である『新華日報』、『南京日報』、『揚子晩報』が南京大虐殺について共同で発表した報道記事はあわせて800本余りある。その数は、90年代中後期になって急上昇した。ある年には、年間100本以上に達した。それらの報道のテーマをみると、新資料の発見や新発掘物と新証人についての内容で、おもな目的は、日本軍の中国への侵略や南京大虐殺の真相を明らかにす

るためである。90年代中後期以後の報道テーマの範囲も広がっている。例えば、中日両国における南京大虐殺についての研究成果、関連映画の紹介、日本老兵の謝罪、幸存者への関心などである。南京のマスコミは、南京大虐殺という歴史問題についての報道にも、だんだん理性的態度をとるようになった。南京市民の心に埋まっているトラウマ的記憶には、南京大虐殺の史実と現実生活にある民族感情が、混じっていて共存共生している。

3. 残された課題：トラウマを癒す

20世紀80年代以来、日本社会では、さまざまな南京大虐殺否定論が続出した。一方、1949年以後、中国国内でも各分野において、南京大虐殺についてまともな調査研究が行なわれておらず、幸存者の広い調査もされていなかった。しかし、日本右翼の南京大虐殺否定論が続出してから、南京の歴史学術分野は、はじめて、幸存者を重要視するようになり、調査をはじめたのである。このような背景を基にした調査は、おもに日本軍暴行についての証拠の収集であった。調査のおもな目的は、日本右翼の「でっちあげ」という言論に抵抗するためであった。幸存者は、常に歴史の証人として、公衆の前に立たされた。残念なことは、幸存者こそが歴史証人だという考え方が、20世紀80年代から21世紀の今日まで、ずっと持たれていることだ。実は、南京大虐殺という事実を証明できる歴史資料は十分にある。その歴史を反省するにあたって、不幸な幸存者に何回も現場に来てもらい、彼らを日本右翼に抵抗する武器にする必要はないと思う。そのために、今は、これまでの考え方を変える時期であり、ヒューマニスティックに幸存者を思いやる視点から、彼らのトラウマを癒す問題を解決しなければならない。

西洋では幸存者のトラウマについての調査研究と治療は早くから、社会の注目を集めた。西洋社会の各分野では、ナチスの大虐殺による幸存者への社会的治療と研究は、第二次世界戦争が終わった時点からすでに始まり、研究成果は数え切れないほど多い。それらの研究の視点の中には、幸存者の感情混乱、家族からの認め、幸存者の反応遅延などがある。さらに、世代観連鎖についての研究も多い。臨床治療の面でも、まとまった先進的な社会治療案と措置が多くある。

社会発展のレベルに規制されて、現在の中国では、物質的援助が重視されているだけで、トラウマを癒すということがあまり重要視されていない。それより、むしろ、どうやってトラウマを癒したらいいかわからないといってよいだろう。現に、あの戦争や大虐殺を体験した生存者の数が減りつつある。時間が経つにつれて、トラウマ治療を受けることのできる生存者がだんだん少なくなっている。ついでに言いたいのが、戦争の被害者だけでなく、加害者もトラウマの治療が必要である。彼らの多くは、老年になっても、絶えず戦争記憶に苦しめられている。社会心理学者らは彼らの心理的危機を注目すべきである。

周知のように、時間が経ち、体験者がいなくなるにつれて、戦争の暗い影が消えていくわけではない。現社会にあるいろいろな要素は、若者の心にあるトラウマや戦争記憶を喚起し、再び戦争を引き起こすことがありえる。そのために、中日の人々のトラウマを治療することは、単なる生存者と被害者のためだけでなく、全社会のため、とくに、若者のためである。ここ数年来、中日両国の若者の間で行われている相互訪問や討論のチャンスがますます多くなっている。絶えず行われている相互訪問や対話によって双方の理解がだんだん深まるようになった。

今回、日本立命館大学の村本邦子教授、アメリカのアルマンド教授、笠井綾氏が、南京師範大学とともに、「南京を思い起こす 2009」というテーマで中日HWHの形で行ったワークショップは、とても重要な意義のあることだと思う。日本、中国と韓国から、30数名の教師と学生がともに戦争記念館を見学し、生存者の体験を聞き、ドラマセピラーなどのいろいろな活動で、対話し検討してきた。皆さんは、心を開いて感想を語り合った。これによって、平和を望む気持ちを表した。参加者の多くは、心が解放され、歴史の重荷が下ろされたという感想を持ったようである。これは、完全にHWHワークショップが目的に達した証拠ではないかと思う。

近頃、社会各分野、とくに学術分野では、多くの学者はトラウマを癒す重要性を認識するようになっている。中日韓三ヶ国の指導者も、この間、東亜共同体の構想を共同で発表し、そして、東亜共同歴史研究の課題を設けようと提案した。さらに、過去の戦争によるトラウマを未来東亜共同体の貴重な宝物にするよう提案した。互いに心で対話し、真心で付き合うことが出来れば、ともに

不幸な歴史に面することも出来ると固く信じる。また、政治、歴史、社会心理、医学などの手段を利用し、違う形で、政界、学界、民間、とくに若者たちと交流すれば、中日間にあるトラウマを癒すことが出来、中日の新時代を迎えることが出来ると信じている。

皆で頑張ろう！

历史创伤的治疗：中日关系无法跨越的课题

张连红（南京师范大学教授、历史学）

一、幸存者的精神创伤

相对于物质生活状况而言，幸存者精神创伤却一直没有引起人们的关注，他们更很少得到有针对性的社会治疗。幸存者在大屠杀期间的遭遇和战后的生存经历各不相同，因此，在精神创伤上的表现事实上也有很大差异，除了部分自我治疗能力较强的幸存者外，许多幸存者未能摆脱过去的阴影，年轻时的精神创伤开始“复活”，他们经常为恶梦惊醒，他们言行开始日益偏离日常生活习惯，而且随着年龄的增长，这种精神疾病的表征越来越明显。在笔者调查南京大屠杀幸存者的过程中，发现在许多幸存者身上这些症状也有不同程度的体现。归纳起来，幸存者的精神创伤下列三种类型较为典型：精神分裂型、自我封闭型、神经质型。

精神分裂型。在笔者所调查的幸存者中，2003年去世的黄玉英老人可算是精神分裂型的典型案例。黄玉英（化名），女，1926年生。1937年6月，她和父亲等全家由北京迁到南京。12月13日，她同父亲行至湖南路口时，被日军遇见，日军并用刺刀戳她父亲的胸部，又用枪托砸她父亲的头部，她父亲便倒到地上，脑浆也流了出来。黄玉英后来逃到金女大难民所，金女大难民所负责人魏特琳（中文名华群，当时难民都称她为华小姐）收容她，并帮助她上学。在大屠杀期间，对于失去父亲的黄玉英而言，华小姐无疑成了她的亲人。到了晚年，她日益思念华小姐，见人整天提起在南京大屠杀期间的救命恩人美国传教士华小姐，后来她到我们学校向我要了一张放大的华小姐的照片，她说她要将华小姐的照片挂